【特集】文化芸術分野における大原社会問題研究所資料

特集にあたって

藤原　千沙

大原社会問題研究所は，社会労働問題に関する研究所であると同時に，利用者の資格を問わない専門図書館・資料館でもある。所蔵している資料は，自らの調査・研究のために研究者や市民に閲覧利用されることが多いが，美術館に貸し出されることもある。それは美術館の展示会で披露されるにふさわしい資料を研究所が所蔵しているからであるが，そのことは専門家から解説を受けてこそ，研究所としてもその資料の意味や価値を理解することができる。

『大原社会問題研究所雑誌』705 号（2017 年 7 月）に掲載した武居利史・府中市美術館学芸員による特別寄稿「画家・新海覚雄と戦後社会運動――《真の独立を闘いとろう》までの道」は，府中市美術館の 2016 年度常設展「燃える東京・多摩　画家・新海覚雄の軌跡」に研究所が所蔵している新海覚雄の作品 17 点を貸し出したのを契機としたものである。本特集は，この特別寄稿を発展させ，これまで美術館への貸し出しでつながりのあった学芸員の方々に，研究所の所蔵資料にかかわる論稿を寄せていただいた。

喜多孝臣・静岡県立美術館学芸員とは，2020 年練馬区立美術館在籍時に「津田青楓とあゆむ明治・大正・昭和展」関連で研究所所蔵資料 4 点を貸し出した際にご縁をいただいた。プロレタリア美術運動を本の装丁という視点から考察した本特集の論稿は，研究所の所員が日々接している図書資料の色やかたち，重みや手触りの意味に，気づきを与えてくれる。

町村悠香・町田市立国際版画美術館学芸員とは，2022 年「彫刻刀が刻む戦後日本――2 つの民衆版画運動展」関連で研究所所蔵資料 9 点を貸し出した際にご縁をいただいた。本特集の論文は研究所が貸し出した「新世紀群」の資料をもとに，大分で活動した美術サークル「新世紀群」とは何だったのか，戦後日本美術史のなかで論じている。

古家満葉・長野県立美術館学芸員とは，2018 年川崎市市民ミュージアム在籍時に「川崎セツルメント展――地域に根差した社会事業」関連で研究所所蔵資料 3 点を貸し出した際にご縁をいただいた。本特集ではセツルメント活動と芸術文化との接点を現代のセツルメントとも呼べる実践事例も絡めて考察しており，1919 年に研究所の創立総会が開かれた石井記念愛染園を想起させる。

また，研究所の応接室にある大原孫三郎・高野岩三郎の肖像画を描いた画家・矢崎千代二について，矢崎研究者の横田香世氏に執筆を依頼した。なぜ研究所に矢崎の作品があるのか，横田氏が高野日記から読み解いた高野と矢崎の交流は，研究所としても認識していなかったつながりである。

なお，本特集にあたり，研究所が所蔵している絵画資料の一部について現状を確認しつつ，入手の経緯を調べ，長期の保存に必要な手当てを施した。その記録も「資料紹介」として付した。

本特集によって研究所の所蔵資料がより注目され多分野に活用される契機になれば幸いである。

（ふじわら・ちさ　法政大学大原社会問題研究所教授）